

## 特色ある共同利用・共同研究拠点 中間評価結果

大学名	京都芸術大学	研究分野	芸術一般
拠点名	舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点		
学長名	吉川 左紀子		
拠点代表者	天野 文雄		

### 1. 拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

#### [拠点の当初目的]

本研究拠点は、舞台芸術一般の学術研究において、舞台芸術作品の創造・受容の多様なプロセスを、「劇場を用いた研究」という手法を通じて実践的に探究していくことを目的としている。具体的には、本学研究者が中心となって行う「テーマ研究課題」と、学外の研究者に広く公募する「公募研究課題」に基づいた各研究プロジェクトが、本学が所有する本格的な劇場施設である「京都芸術劇場」（大劇場：春秋座、小劇場：studio21）を使用した「劇場実験」を核として、上記目的を達成し、広く公開していこうとするものである。

芸術系大学のコアは、何よりも芸術作品の「創造」にある。しかし、国際的な競争が進行する現代日本の状況においては、未来の「創造」のための実験機能や研究機能の充実が急務であると言える。芸術系大学における「作品創造」の役割を〈ファクトリー機能〉、「創造のための研究や実験」の役割を〈ラボラトリー機能〉と名付けるならば、本研究拠点における各研究プロジェクトは、もっぱら後者の機能を担い、日本における舞台芸術の創造と研究の有機的な結びつきを目指した新たな研究手法のパイオニアとなることを目的としている。各研究プロジェクトは、研究者とアーティスト（芸術系大学に所属する者を含む）が共同で研究チームを組み、「劇場実験」を、それぞれの研究プロセスの中心に据えたプロジェクトを実施する。

#### [拠点における目的の達成状況及び成果]

##### A 目的の達成状況及び成果

本研究拠点における研究事業は、「総合的な舞台芸術研究」もしくは「総合的な劇場学」という新しい研究分野を切り拓くことを長期的な目標とする、「芸術系大学」を拠点とした他に類例のない研究事業である。平成25-30年度の最初の6年間（＝以下、「第一期」）の研究成果と課題を踏まえ、令和1-6年度（＝以下、「第二期」）の上半期にあたる過去3年間の研究成果は以下の通りにまとめることができる。

##### （1）目的の達成状況、及びその成果

① 当初掲げた「舞台芸術一般の学術研究における、作品の創造・受容の多様なプロセスの実践的探究」という研究目的に関しては、当該期間の3年間に、「テーマ研究課題」、「劇場実験型公募研究課題」、「リサーチ支援型公募研究課題」の3つのカテゴリーにおいて、19件——コロナ禍の影響による延期のため複数年にまたがるものは1つに数える——にのぼる活発で多様な研究プロジェクトが展開された。それらのいずれにおいても、伝統芸能、現代演劇、コンテンポラリーダンス、現代美術、現代音楽、メディアアート、実験映画等の異なる芸術領域を横断する多様な創造・受容のプロセスが探究され、多彩で意義ある研究成果を得ることができた。

こうした新たな手法による舞台芸術研究は、美学・芸術哲学研究、文学研究、社会学研究、人類学／民俗学研究等や、モーションキャプチャー技術の先端的な応用研究、さらには「世界的に蔓延する民主主義の危機と社会的「分断」、「芸術創造の集団作業におけるハラスメント問題」、「障害者との共生」のような社会課題等とも接続されることで、舞台芸術の創造・受容と実社会との接続可能性を、現代における社会的な視野のなかで多角的に考察することが可能となった。

② 「研究者とアーティスト（＝芸術系大学に所属する者を含む）が共同研究チームを組むこと」、「〈劇場実験〉を中心に据えたプロジェクトの実施」については、コロナ禍による緊急事態宣言等の影響

により、研究チームが対面で試行錯誤することが不可欠である「劇場実験」は大きな影響を受け、過去3年間に予定されていた延べ10件の劇場実験のうち、実施できたのは6件にとどまった。しかしながら、実施できた6件においてはいずれも大きな研究成果をあげ、そのうちの4件は研究期間終了後、研究成果を踏まえて完成された4本の優れた舞台芸術作品につながり、高い評価を得た（この点については後述）。当該期間中に、本研究拠点の研究活動に参加した研究者及びアーティストの実数は322人にのぼるが、全て「共同研究チーム」という形態による参加であった。実施された全ての研究プロジェクトは、「京都芸術劇場」を研究目的に応じて効果的に活用した。国際的な協働研究も7件実施され、中国、香港、マレーシア、シンガポール、カナダ、イタリア、ドイツ等のアーティスト、研究者の参加を得ることができた。

③ ②の結果として、新しい実践的な舞台芸術研究における「ファクトリー機能」／「ラボラトリー機能」という、本研究拠点のキーコンセプトの有効性は実証された。そのことは、研究を経て完成された舞台作品（完成版）の高評価からも裏付けられている。本研究拠点が、「劇場」を拠点施設とし、舞台芸術作品の創造を研究テーマに据えている国内唯一の特色ある共同利用・共同研究拠点であることは、ますます国内に広く浸透しつつある。これに関連して、本研究拠点リーダーとメンバーが中心となり、「ラボラトリー機能の構築」に特化したテーマを掲げた大型研究プロジェクトが、科学研究費・基盤研究（A）に合計6年間にわたって継続採択されたことも、本研究拠点のコンセプトの有効性に対する評価の一端であると考えられる（※）。

（※）科学研究費・基盤研究（A）「「大学の劇場」による「ラボラトリー機能」の構築——芸術系大学の実践的研究モデル」（研究課題／領域番号：17H00910、研究代表者：天野文雄、平成29—平成31年度）、及び、科学研究費・基盤研究（A）「アジアの舞台芸術創造における国際的な「ラボラトリー機能」の実践的研究」（研究課題／領域番号：20H00009、研究代表者：天野文雄、令和1—3年度）、を指す。

## B 関連研究者コミュニティや研究分野へ与えた影響等

本研究は、社会における「芸術創造の現場」に開かれたプロジェクトである。したがって、本研究拠点に関連のある「研究者コミュニティ」とは、大学に所属する研究者だけでなく、舞台芸術作品の創造・受容に直接携わっているすべてのアーティスト、技術者等も対象となると考えている。

① 「アーティストと研究者が共同研究チームをつくり、劇場実験を行う」という本研究拠点の研究手法を通じて、毎年平均約100名のアーティストと研究者が参加する基盤はすでに完成しており（※）、本研究拠点自体が、新たな研究コミュニティの実質をすでに備えつつある。「日本演劇学会」「舞踊学会」「表象文化論学会」等に属している研究者も少なくないが、複数の学会のみならず、舞台芸術、現代美術、現代音楽、メディアアート等の芸術創造の現場にかかわるアーティスト、技術者、プロデューサー、キュレーター等を横断的に結ぶ、他にはみられない場が誕生しつつあり、「創造と研究の融合」の名のもとに、実演家と研究者の共同的なコミュニティの成立基盤が着々と形成されつつあることは、これまで創造現場との乖離が大きかった日本の舞台芸術研究にとって画期的であるといえる。とりわけ、毎年定例開催が定着した本研究拠点主催の「研究事業報告会」は、オンライン開催の形式を活用することによって、対面型よりも多くのオーディエンスを獲得することができ、多様なバックグラウンドを持つ運営委員との交流も活発になされることで、「コミュニティ」の成立に大きく寄与しつつある。

（※）この数値は、第一期の6年間もほぼ同様であった。

② 第一期においては、舞台芸術研究において近年発展しつつある「ドラマトゥルク研究」と「アートマネジメント研究」を、「ラボラトリー機能」を通じて、創造の現場と接続された実践的研究にまで深化させることができた。第二期上半期においては、第一期の成果を、舞台芸術作品の国際共同制作に応用する可能性を探究すべく、第一期で大きな研究成果をあげ、そこでの成果を国際学会等の場で幅広く発信しつつあるダンス・ドラマトゥルクの中島那奈子氏に、複数年（令和2—4年）の国際共同研究プロジェクトの立ち上げを「テーマ研究（＝非公募枠）」において委嘱し、コロナ禍の影響を受けつつも着実に成果をあげ、将来的な研究コミュニティをリードしうる実績を蓄積しつつある。中島は、2000年代以降の世界的な舞台芸術研究者であるドイツのエリカ＝フィッシャー・リヒテ他が編纂した*Dramaturgies of Interweaving Engaging Audiences in an Entangled World*, (Routledge, 2021) に、本研究拠点における研究成果をまとめた“No(H) To Trio A: Interweaving Dramaturgies for a Performative Exhibition of Yvonne Rainer’s Work” (pp. 63–79) を発表している他、シンガポール、ドイツ、オーストリア等でも招聘講演を行い、この分野の研究を国際的にリードしつつある。

③ 第二期上半期においては、研究モデルとしての「ラボラトリー機能」が、若手の研究者等に浸透し、

たとえば、松尾加奈（東京藝術大学研究助手）、島貫泰介（美術ライター、編集者）、岡田蒔子（大阪大学特別助教）等が牽引する新たな視点からの研究プロジェクトに結実する動きも顕著である。川口智子、木村悠介、ユニ・ホン・シャープのような若手アーティストが実質的な主体となる研究プロジェクトの割合も全体的に向上し、村川拓也（演劇、映画）、田村友一郎（美術）、日野浩志郎（音楽）、田中みゆき（キュレーター）のようなすでに実績のある中堅アーティストやプロデューサー、さらには、多和田葉子（作家）、吉増剛造（詩人）、川村毅（劇作家・演出家）のような、日本を代表するアーティストの参加もあり、「ラボラトリー機能」を核として、幅広い世代が集まる研究コミュニティの実質的萌芽が育ちつつある。

## 2. 評価結果

### （評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの低調であり、今後、専門委員会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

### （評価コメント）

本拠点は、舞台芸術一般の学術研究において、舞台芸術作品の創造と受容の多様なプロセスを、劇場を用いた研究という手法を通じて実践的に探求することを目的として拠点活動を実施している。共同利用・共同研究拠点としての活動は行われているものの、低調であると判断される。

具体的には、劇場を活用した先端的で独自性のある実験活動に積極的に取り組んでおり、共同研究の応募件数も多く、特色ある共同研究が実施されているものの、それらによる学術的成果や効果について、客観的な指標に乏しく不明確であり、共同利用・共同研究拠点として行う学術研究と舞台芸術の実践との関係も曖昧である。また、アーティストとの共同研究により多彩な研究が行われる一方、大学院生等の参加は低調であり、若手研究者の育成が十分に行われているとは言えない。

今後は、個人間の繋がりのみならず他大学等との広い連携による研究者ネットワークの醸成や若手研究者の受入れ拡大等、研究拠点としての機能強化を図るとともに、研究活動成果をどのように創出し、劇場を活用した総合的な人文学の創出という目的に向けた具体的な道筋を検討していくことが求められる。